

## 言語構造における時間の単位

ジョン・マーツ

Diachrony と Synchrony という概念やその現象は構造主義の様々な文献において利用されている。この Diachrony と Synchrony という概念の創案は Ferdinand de Saussure の講義を、彼の死後 1915 年に編集した *Cours de Linguistiques Générale* に帰し得る。そこでは通時言語学 (linguistiques diachronique) は時代の変化に伴う言語全体の変化を研究する学問であると定義され、共時的言語学 (linguistiques synchronique) はある一時期における、ある単一の言語に関する研究であると定義される<sup>(1)</sup>。又、Saussure の記号の、直線的順序に関する syntagmes と記憶的連想に関する rapports associatifs の区別<sup>(2)</sup>や、Roman Jakobson の換喩と隠喩の区別<sup>(3)</sup>も、同様の性質を持つと考えることができる<sup>(4)</sup>。しかしながら、このような区別は相互に類似したものはあるが、厳密な意味では等価に用いられているのではない。

この論文では、これらの類似した概念を統合し、言語や文学の形式を分析するための統一した枠組を構成しようとするものである。更に、その枠組を利用して、文学における形式と内容の相互作用について、考察してみたい。

### ・言語の二次元性

言語の物理的な側面はすべて時間と信号振幅という 2 つの次元で説明できる。又、どの様な分割や、変換によっても、言語の物理的特性の二次元性は保持される。この 2 つの次元のうち、時間に関する現象は「通時的」、振幅に関する現象は「共時的」であると考えることができる。言語的なコミュニケーションはすべてこの物理的な側面を有するので、これも二次元性を保つ。この 2 つの次元を、文学の形式的分析の基礎として設定したい。

### ・記号とその通時的・共時的連合

言語における二次元性の特徴や可能性を、卓上電子計算機という簡単な例を以て具体的に考えてみたい。電卓においてキーを押す順番は通時の次元に相当

し、キーの選択は共時の次元に相当すると考えていい。或る特定のキーを見れば、この2つの次元による2つの連合が理解される。一方ではまず、各キーと、特定の概念が連合する。例えば「3」というキーはただのキーでありながら、「3」という概念に連合される。この連合は押す順番と関係しない故に、共時的であると言えよう。

他方では、各キーと、通時的な機能が連合され、キーを押す順番を決定する。「3」、「5」や「8」は、数字(digit)という共通の機能を有するので、演算にあたって、相互に置き換えてもさしつかえない。数字の他には、「+」や「×」などの演算もあるし、「=」にも「.」にもまた別の機能がある。

これらの機能によって、キーを押す順番の許容し得るすべてのパターン、いわゆる syntax が構成される。例えば、「数字キー、演算キー、数字キー、=」という syntax の1パターンでは、「1 + 2 =」とか「6 ÷ 8 =」とかがすべて可能である。

この様にして、以下の4つの範疇によって、電卓に用いられる「言語」とでも呼ばれる作用は、すべて説明可能である。

- a) 各々のキー。
- b) 各キーと、個々の概念との共時的連合
- c) 各キーと、それらの持つ機能の通時的連合。
- d) 通時的な機能を利用した syntax。

言語においても、この4つの範疇が同じく出現するはずである。例えば、形態論においては、各形態素には、共時的な概念の連合(意味)も、通時的な文法的機能の連合も確認できる。又、同様に、文法的機能によって、形態素を順番に配置するパターンの一組が統辞法(syntax)として確認できる。

しかしながら、言語の形態的説明は言語全体を説明するのに不充分である。例えば、音素の物理的な要素や、講話(discourse)における文と文の話題的(topical)な関係については、何の説明もしていない。

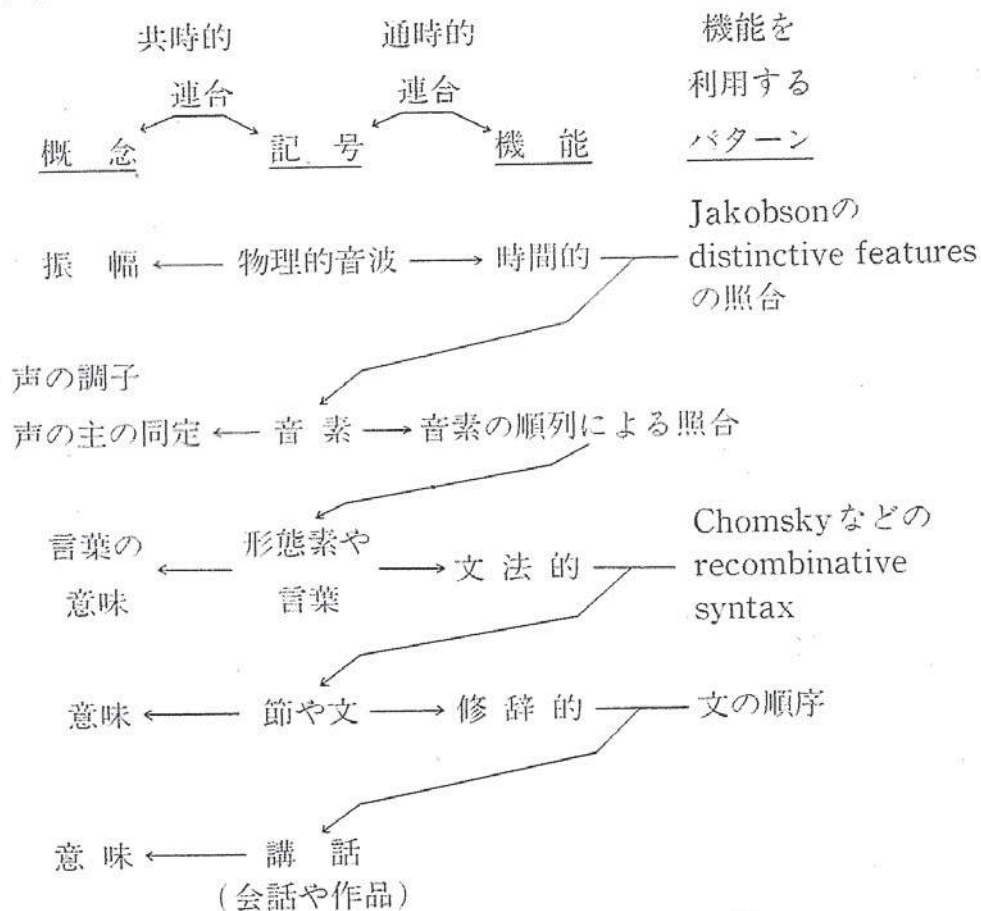
#### ・記号の通時的群化

音素の物理的な側面や discourse における topical な関係をも含めた現象を

統一的な枠組で説明するために、次の直線的群化 (grouping) という概念を提案したい。まず形態素と音素の関係を考えてみたい。どの言語においても、基本となる音素の数は限られている。しかし、その音素の群化した順列によって、すべての形態素や単語が表わされる。更に、完全な音素の集合においてのみ、共時的また通時的な連合が存在し得る。

更に群化の現象は音素と形態素の関係のみにおける訳ではない。形態素と文 (sentence) の関係にも、文と discourse の関係にも観察される。この様な言語の諸側面は次の図表で示すことができる。

図表 1



この図表の働きを説明するために、次の図を考えてみたい。

図表 2

耳に入る音波



音素群化

/a:/ + /i:/ + /æ/ + /m/ + /l/ + /i/ + ...

形態素群化

I + am + liv + ing + at + ...

文章群化

I am living at the Villa Borghese.

### ・通時的機能によるパターン

この例の共時的な、いわゆる意味と関係する側面については後に述べるが、ここではまず、通時的な群化の心理学的な処理について考えてみたい。人間の記憶の機能の中で最も基礎的な働きをするのは感覚記憶という、100ミリ秒から500ミリ秒の間、入力した情報を一時的に貯えておく機能である<sup>(5)</sup>。

なおまた、こういうパターンは通時的に働くが、同時に1つしか働かないとは限らない。その上、JakobsonとHalleが指摘するdistinctive featuresという、音素の区別に必要となる最も根本的な要素は、こういった音素群化のレベルで働くパターンによるものと推定できる<sup>(6)</sup>。

次に形態素のレベルを考えてみると、ここでも音素群化と同様の通時的過程が働いていることが観察される。まず、音素群化のパターンと類似したパターンによって、音素が群化され、形態素となる。形成された形態素は共時的な連合も通時的な連合も持つようになる。

ここで注意に値するのは、音素のパターンは限られた数しか存在しないのに形態素のパターンは非常に多いという点である。又「通時的」ということについて考えてみると、音素や形態素が並ぶ「順序」というのは、時間の経過によるものであり、それ故に「通時的」と言われる。例えば“be”という言葉を発音する場合には、/b/という音素がさきに、/i:/という音素があとに来る。しか

し /b/ + /i:/ という2つの音素の連続が“be”という形態素になるためには、この2つの音素が認識過程のあるレベルに到達し、そこで2つが同時に処理されなければならない。従って「通時的」という概念は、時間の次元のあらゆる変化を示すのであるが、必ずしも時間そのものを示す訳ではないということがわかる。

次に、形態素が、その通時的な連合によって、文に群化される。この文 (sentence) というレベルにおける群化のパターンは、変形文法が、その基礎とした、再結合的な「規則」と同一視できる<sup>(7)</sup>。

しかし、文の通時的連合は、形態素の通時的連合とは多少違う性質を持っている。形態素の通時的連合、つまり文法的な品詞の区別は歴然たるものである。それに対して、文の通時的連合は曖昧であることが多い。従って、文の群化された講話 (discourse) というのは、必ずしも文の通時的連合に働くパターンによるものであるとは言えないのである。

しかしこの様な文の連合のパターンが全く存在しない訳ではない。例えばウラジミール・ボロフツォフの『民話の形態学』(1927)<sup>(8)</sup>には、多数のロシアの民話における人物の「機能的」出来事は必ず同じ順序で出現する、ということが示されている。又、Lord Raglanが1935年に書いた *The Hero*<sup>(9)</sup>には、神話における英雄の活動はほとんど決まった順序で展開すると述べている。しかしそのような出来事に当たる通時的「機能」は、文と一対一の対応を持つものではなく、形式よりむしろ内容によるものなので、形態素の通時的機能とは異なる。

文が群化することになり、講話 (discourse: 例えば会話や文学作品) が一応完成するのであるが、ここでもまた、通時的な連合が不明瞭である。更に文学における、作品と作品との通時的な関係については多数の見解がある。その一つに Northrop Frye の *Anatomy of Criticism* における小説様式 (fictional modes) の進化論がある<sup>(10)</sup>。

#### ・言語の過程としての情報削減

通時的なパターン (syntagm) による言語分析のみによって、解釈の可能性は説明しつくすことができない。各言葉や各文についての共時的な面、つまり意

味という側面（図表1）からの解釈が必要なのである。意味やそれによる解釈は記憶ともかかわりがあるし、理性ともかかわりがあるが、これらを考えるためにまず、先に述べた大脳における言葉処理をもう一度考えてみたい。

人間の声を考えてみる。音波として入力された感覚入力（感覚記憶にとどまっている間、すなわち100ミリ秒から500ミリ秒の間に処理され、音素として次の段階に送りこまれると考えることができる。しかしこの時には、その音素の元となった音波自体の情報はすでに残っていないのである。

これと同様に、文章を読む時に、その文章の言葉が生成した概念や連合は記憶されていても、一つ一つの言葉そのものはほとんど記憶には残らないものである。例えば本を読み終わった時、その本の示した概念やその本の筋書は覚えていても、それらを構成していた一つ一つの言葉を覚えている訳ではないのである。従って、言語の理解というのは過去の経験の論理的解釈であるのみならず、同時に過去の経験の「濾過」つまり、過去の経験を次々に符号化することにより、そこから、ある概念を抽出し、記銘するという過程である。又、その過程は通時的でもあるし、共時的でもある。

### ・思考のパラダイム

ここまで述べてきたことを要約すると、言語の通時的次元と、そこに働く群化という変形によって、人間の、言葉に関する時間の感覚は様々な形式を有する。更に、その群化を決定するパターンは、心理的なものであり、人間の相互に共通なものである。

Edward Sapir は『『真実の世界』はかなりの程度にわたって、その集団の言語習慣の中に無意識のうちに堆積されているものである』と言っている<sup>(11)</sup>。又、Sapir の考えを更に進めて、Benjamin Lee Whorf (1939) はホピーインディアンの言語が、時間や、空間的移動についての個人の理解にいかほど深く影響を与えているかを示した<sup>(12)</sup>。又、マルクス主義者は思考と表現の構造的特性について長い間研究を続けている。例えば、Frederic Jameson は、ヘーゲルの主張を取り入れながら、範例的 (paradigmatic) な機構の相互連絡性はそれ以上簡略化されないものであることを強調している<sup>(13)</sup>。彼に対して、Lucien Goldmann

は“genetic structures”とか“trans-individual mental structures”という概念を用いて、イデオロギーを構成するパラダイムで、明確な「シンタクス」を想定しようとしている<sup>(14)</sup>。

言語の形而上学という成長しつつある学問が、言語の物理的な制約そのものに、その基礎を発見し得ることを望む。

〈註〉

- (1) Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistiques Générale*, 1915 (Payot, Paris, 1972), p. 117.
- (2) Ibid., pp. 170-171.
- (3) Roman Jakobson and Morris Halle, *Fundamentals of Language*, (Mouton, 1971), pp. 72-96.
- (4) Terence Hawkes, *Structuralism and Semiotics* (Methuen, 1977), pp. 76-82.
- (5) Peter H. Lindsay and Donald A. Norman, *Human Information Processing* (Academic Press, 1977), Chapter 8.
- (6) Jakobson and Halle, pp. 31-48.
- (7) Adrian Akmajian and Frank W. Heny, *An Introduction to the Principles of Transformational Syntax* (MIT Press, 1975).
- (8) Vladimir Propp, *Morphology of the Folktale* (University of Texas, tr. 1968).
- (9) Lord Raglan, *The Hero* (London, 1936).
- (10) Northrop Frye, *Anatomy of Criticism* (Princeton, 1957), “First Essay: Historical Criticism.”
- (11) Edward Sapir, *Selected Writings in Language, Culture and Personality*, (Berkeley, 1949), p. 162.
- (12) Benjamin Lee Whorf, “The relation of habitual thought and behavior to language” (1939), in *Language, Thought, and Reality* (MIT Press, 1956).
- (13) Frederic Jameson, *Marxism and Form* (Princeton, 1971), p. 306. “...the whole tangled, dripping mass of the Hegelian sequence of forms...”
- (14) Lucien Goldmann, *The Hidden God* (London, 1964).

\* \* \*

付記 本稿は昭和57年4月名大英文学会における「構造主義と記号学」と題したコロキウムで発表したものである。